



卓 話

うに、教養教育の重要性がいま再認識されているのです。ではあの教養部解体は一体何だったのでしょうか。

「シュテファン大寺院の 宅配はお断り」

金沢大学名誉教授 高山 俊昭氏

-高等教育が直面する問題-

レオポルド・アウアー
(1845-1930) は名ヴァイオリニ
ストでしたが、エルマン、ハイ
フェッツ、ミルスタイといった



著名なヴァイオリニストを育てた名教師としても評価されています。一方ヨーゼフ・ヨアヒム
(1831-1907) もヴァイオリンの名手でしたが、彼はアウアーとは違って、能力ある中級の生徒を大勢育てたことで、これまた高く評価されているのです。当時のオーケストラの質の向上に寄与したヨアヒムの功績も、大きなものだったのでしょうか。

さて私が教養部で教壇に立っていた頃の金沢大学は、教養部廃止問題で大揺れでした。部長職を拝命していた私は、教養部の舵取りに四苦八苦していました。

大学の先生に求められるのは教育と研究ですが、教育の使命の一つが後継者の育成でしょう。私は20年余り、教養教育を担当しました。聴講した学生は、私の専門とは縁もゆかりも無い分野へと巣立っていきました。それはとりもなおさず、自分の後継者を育てることができないという不満につながります。私はアウアーになることをあきらめ、ヨアヒムの歩いた路をたどることになったのです。

さて金沢大学教養部は間もなく崩壊し、全国の大学の教養部もまた同じ運命をたどりました。教養教育は全学部の先生が負担することとなりましたが、多くの先生は自分のプラスにならない教養教育の担当には消極的で、中には何の役にも立たぬとの理由で教養科目を減らし、資格の取れる専門科目を増設する大学まで出現したのです。でも藤原正彦の『国家の品格』（新潮新書）に、「今後の日本を背負っていく人間に求められるのは、文学、哲学、歴史、芸術、科学といった、一見何の役にも立たないような教養を身につけたエリートだ」と書かれているよ

ところで文部科学省が平成13年6月に発表した「大学の構造改革の方針」は、当時の遠山敦子文部科学大臣の名を取って、遠山プランと呼ばれます。これは大学にも民間的発想の経営手法と第三者評価による競争原理を導入するといった構想です。その結果、少子化が進む世の中だということに、規制緩和という名の競争原理の導入によって、多くの新しい大学や学部が誕生しました。「環・国・人・情」と言われたように、環境、国際、人間、情報という名の学部が設置される一方、マンガ学科という珍奇な学科も誕生しました。電車の車内には「父が薦める、私が選ぶ」と書かれた大学の広告が貼り出され、一方首都圏では郊外に移った大学が続々と都心に戻りつつある、これもすべて学生確保のための手段なのです。

大学も学生が喜ぶ講義をしないと廃校の憂き目にあうことになりますから、先生がたは自分の研究を放り出して教え方の改善に切琢磨磨するのです。試験で学生にペケをつけていた先生は「学生による授業評価」で逆に学生からペケをつけられ、その結果ペケの数が多いとクビにもなりかねません。これこそ民間的発想の経営手法導入の結果なのです。でも4月23日付けの東京新聞夕刊で、内田樹氏が、努力がただちに成果として現れる（現れねばならない）「ビジネス・モデル」に準拠して教育を論じていることに疑問を呈しているように、遠山プランにはいろいろ問題があるのです。

その遠山プランが掲げるトップ 30には程遠い中小の大学で学生を教育する教員たちは、名ヴァイオリニストのヨアヒムに例えられるかもしれません。そして佐々木毅氏が「高等教育も、外観上の派手な動きとは別に、基礎・基盤の崩壊が近付いているのではないか」（4月15日付け東京新聞）と警鐘を鳴らすような、そんな時代だからこそ、将来の日本を背負う教養人育成のために、いまこそヨアヒムの活躍が必要なのだと思うのです。

ユネスコの給費留学生としてウイーン大学に留学していた冬のある日、遅くまで研究を続けた私は、

管理人の不注意で無人の研究棟の中に閉じ込められ、凍え死ぬ思いで一夜を過ごしたことがあります。翌朝主任教授が当直の不注意を私に詫びた後、こう言われたのです。「君が帰国後、もし必要な文献があったら、いくらでもコピーして送ってあげよう。でもシュテファン大寺院を日本に送ってくれと言われても、それはできない相談だよ」。専門馬鹿になるな！というのが先生の口癖でした。その言葉が、20年もの間教養

教育に携わった私にとって、大きな励みとなったのです。

名ヴァイオリニストが演奏するバッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタの演奏は、私を恍惚とさせます。でもその名ヴァイオリニストも、優秀なオーケストラのバックがなければ、美しいメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を演奏することはできないのです。